

口語法別記

全





# 正誤表

引用書目	頁	行	誤	正
端書	七	一〇	同帝ノ頃	一條帝ノ頃
本文	一四五	一二	鎌倉時代	使 南北朝時代
同	一九五	七	南北朝時代ハ五行徒然草……ノ前ニ入ル	
同	二一〇	一三	室町時代	○室町時代
同	二四五	一四	王朝時代	平安朝時代
同	二六四	四	王朝時代	平安朝時代
同	二七八	六	王朝時代	平安朝時代



國語調查委員會編纂

口語法別記 全

株式會社 國定教科書共同販賣所



會林  
林左

國家發展委員會



中央圖書館

全

國家發展委員會



緒言

本書ハ、別冊口語法ノ附録ニシテ、主査委員文學  
博士大槻文彦ノ擔任編纂セシモノナリ。

大正二年六月

國語調査委員會



緒言

大正二年六月

本館編輯部

編輯部



## 例言

一口語法ノ稿案ハ、明治三十七年ヨリ起草シ、次第ニ改訂シテ、三十九年ニ至リテ成レルモノナリ。其ノ中ノ語法ノ骨子タル所ノミヲ舉ゲタルガ、別冊口語法ニシテ、其ノ各條ノ説明ニ涉ルガ如キモノヲ別ケテ記シタルガ、即チ此ノ別記ナリ。尙、口語法ノ例言ヲ參見スベシ。

一書中ノ行頭、又ハ文中ノ括弧内ニ記シタル數字ハ、口語法中、各條ノ欄上ナル數字ト照合セシムベキ符號ナリ。但シ、助動詞ニアリテハ、口語法ニテハ、各助動詞ノ各活用ヲ別チテ處々ニ説キタレド、此ノ別記ニテハ、其ノ各活用ヲ其ノ各助動詞ノ下ニ集メテ説キタル差アリ。



一此ノ別記ニハ、口語ノ一々ニ就キテ現在各地方ノ差違、及ビ、八九百年來ノ語體ノ變遷ヲ附記シタリ。

一各地方ニ就キテ、關東、東國、又ハ、關西、西國ナド記シタルハ、我が全國ヲ、中央ニテ、大凡ニ東西ニ二分シタル稱ナリ。

其ノ中央部ヲ、或ハ中部又ハ畿内邊ナド記シタルモアリ。

又、山陰山陽兩道ヲ中國トモ記シタリ。

一口語ノ差違ニ、或ハ某縣ト記シ、或ハ某國ト記シタルハ、一縣ノ數國ニ互リテ其ノ差違アルニ因レリ。

一右ノ如ク、口語ノ差違ヲ地名ニテ記シ分ケタレド、確タル境界アルニハアラズ、互ニ犬牙錯綜シタルアリ。唯、大凡ニ言ヘルモノト知ルベシ。其ノ委シキ事ハ、本會ニテ刊行シタル左ノ圖書ニアリ。



行シタル左ノ圖書ニアリ。

口語法調査報告書 明治三十九年十二月刊

音韻分布圖 明治三十八年三月刊

口語法分布圖 明治四十年二月刊

一口語ノ變遷ヲバ、平安朝時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、江戸時代(元祿年中ニ止ム)ト別テリ。平安朝時代トハ山城國ニ京ヲ定メラレテヨリ鎌倉時代ノ初マデナリ。織田豐臣ノ時代ハ、室町時代ノ末ニ入レタリ。

一今日、普通ノ文章ニ記ス言語ヲ文語トシ、談話ナルヲ口語トス。文語ト口語ト兩途ニ別レ始メタルハ、平安朝時代ノ中世ヨリナリ。其ノ差違ハ、發音ト用言ノ語尾活用トノ變轉ニ生ジタリ。古來ノ口語ノ變遷ヲ知ラムニハ、書籍ニ據ラズハアルベカラズ。然ルニ、世ニ存スル書籍ハ、



悉ク文語ニテ記シテアレバ、其ノ變遷ノ徑路ヲ知ルニ由  
無シ。但シ、兩語相別レテヨリ、文語ハ學ビテ始メテ記シ  
得ルモノトナリシガ故ニ、數百年來ノ文語文ハ、人々、己ガ  
日常ノ口語ニアラズシテ、スベテ、學ビテ記ス擬古文ナレ  
バ、コレヲ記スニ當リテ、思ハズ取外シテ、往々口語ヲ雜フ  
ルコトアリシナリ。此ノ事アルニ考ヘツキテ、乃チ、幾多  
群書中ニ就キテ、其ノ雜ヘタル口語ヲ探リ、遂ニ十卷二十  
卷中ヨリ一二語ヲ拾ヒ、五十卷百卷中ヨリ三五語ヲ索メ  
得テ、(全ク見出サバリシ書固ヨリ許多ナリキ)斯ノ如クシ  
テ、辛ウジテ變遷ノ痕ヲ認メタリ。所謂めくらさがしシ  
タルナレバ、多クノ歲月ヲ費セリ。

群書中ニテ、多ク口語ヲ雜ヘタルハ、古クハ、平安朝時代ノ

末ナレ梁塵秘抄ナリ。是レ、今樣歌ナドノ謠物ウタヒモノアレバナ



群書中ニテ、多ク口語ヲ雜ヘタルハ、古クハ、平安朝時代ノ

末ナル梁塵秘抄ナリ。是レ、今様歌ナドノ謠物ウタモノアレバナ  
リ。次ニハ、鎌倉時代ノ平家物語ナリ。是レ、琵琶法師ガ  
琵琶ニ合ハセテ語りテ、人ニ聞カセ耳ニ解セシメムガ爲  
ノ語物カタモノナレバナリ。次ニハ、室町時代ノ義經記、曾我物語、  
御伽草子類ノ小説ナリ。是レ、婦女子ニモ理解シ易カラ  
シメムノ讀本ナレバナリ。次ニハ、幸若舞ノ語物、或ハ、史  
記抄、孟子抄等ノ講義ノ書取、其ノ外ハ、小唄、連歌、狂歌、俳諧  
ノ書、狂言記等ナリ。凡ソ、口語文ナルハ、先ヅハ是等ノ數  
書ニ過ギザルベシ。江戸時代ニ至リテ、口語文ノ書、頗ル  
多ク世ニ出デタリ。

一採收シタル出典ハ、書中ニ載セタルモノ、外ニ、尙多々ア  
レド、重複スルモノナドハ捨テタリ。載セタルモノ、中



ニモ、削リテ可ナラムト思ハル、モ無キニアラネド、今ハ姑ク存セリ。又、書中ニ引用シタル書名ハ、引用書目ニ舉ゲタル外ニ尙多ケレド、僅ニ一二語ヲ採リタルモノハ、其ノ引ケル所ニノミ記シテアリ。

一古來ノ書籍ハ、十ノ八九ハ、京都人ノ作ナレバ、此ノ書ニ變遷ヲ記シタル口語ハ、京都ノ口語ナリ。江戸時代以前ノ東國ノ口語ノ如キニ至リテハ、書無ケレバ更ニ知ルコト能ハズ。尙、探リ漏シタル書モ多々アルベケレド、京都語ハ、自ラ日本國語ト云フベケレバ、日本口語ノ變遷ハ、此ノ書ニテ、先ヅ大略ハ知ラルベシ。

一口語ノ變遷、語原等ニ就キテ、江戸時代ヨリ、明治大正ノ今日ニ至ルマデ、學者ノ已ニ研究シタルアルカ知ラネド、編

者ハ、遍クコレヲ索メテ、遂ニ一書ヲモ手ニシ得ザリキ。蓋



者ハ、遍クコレヲ索メテ、遂ニ一書ヲモ手ニシ得ザリキ。蓋シ、着目セシ人ハ無カルベシ。畢竟、國語學者ハ、口語ヲバ一概ニ俗語ト擯斥シテ顧ミザルナリ。(敷田年治ノ假名遣沿革考アレド、假名遣ノ事ノミ)サレバ、此ノ書ハ、全ク創作ノモノナレバ、隨テ精到ナルモノトハ固ヨリ言フベカラズ。然レドモ、完全ハ後二期シテ、先ヅハ此ノ如シ。

一文語ト口語ト異ナラザルモノハ、固ヨリ記サズ。名詞、副詞ナドニ就キテモ、多クハ言ハズ。唯、發音、用言ノ語尾活用、助詞等ノ變轉ナド、語法ノ相違ニ關スル事ヲ專一二説キタリ。

一原書ノ假名ニ、濁點ナキモノ、又ハ、行文ニ句讀點ナキモノニハ、今、一々加ヘタリ、讀ミ迷ハザラシムガ爲ナリ。



一同一ノ書ニ、數種ノ古寫本、異様ノ板本アルアリ、勉メテ善本ニハ據リタレド、尙、遍ク異本ヲ集メテ對照セバ、文字ノ違ヒアラムモ知ルベカラズ、後ノ訂正ヲ待ツ。



口語法別記

目次

口語法別記引用書目	一
口語法別記端書	一
口語法別記	一
名詞	一
代名詞	一
數詞	二
動詞	四
五段活用	四
上一段活用	三



下一段活用	三
カ行變格活用	四一
サ行變格活用	四一
書いて、咲いた、凌いで、防いだ等	四六
指いて、出いた等	五三
打つて、勝つた等	五一
取つて、切つた等	六〇
言つて、買つた、言うて、買うた等	六四
死んで、往んだ等	七三
呼んで、飲んだ、呼うで、飲うだ、頼んで、讀んだ等	七五
行つて、行つた	八七
第二第三活用形の名詞となること	八九
連體形が終止形となつたこと	九〇
ワ行五段活用の第三活用形の發音	九六



第四活用形の意味	九七
五段活用の未來形推量形	九六
上一段活用の未來形推量形	一〇五
下一段活用の未來形推量形	一〇九
カ行變格活用の未來形推量形	一一五
サ行變格活用の未來形推量形	一二七
上一段、下一段、カ行サ行變格活用の未來形推量形の「よう」	一二二
未來形推量形の變遷	一二三
書かあず、受けえず等	一二四
書くべい、受けべい等	一二五
現在の語を過去にも未來にも用いること	一二九
命令形のこと	一三二
上一段、下一段活用の命令形	一三三
カ行變格活用の命令形	一三四



サ行變格活用の命令形	一三七
命令形の末の「ろ」	一四〇
一種の命令形	一四三
敬意を含んで居る動詞	一四五
丁寧に云う意味の動詞	一五二
形容詞	一五六
形容詞の活用	一五六
形容詞の語根	一五九
よさそう なさそう	一六一
種々の語を形容詞にすること	一六二
形容詞の「よい」「えい」「い」	一六三
形容詞の第二活用形	一六五
かつた かつた	一六五
からぬ	一六八



からぬ……………一六

「くをう」と云うこと……………一六

第一種形容詞の終止形の「し」の「い」となつたもの……………一七

第二種形容詞の終止形の「し」の「しい」となつたもの……………一八〇

第一種形容詞の終止形を文語のまゝ「し」と云うもの……………一八二

第二種形容詞の終止形を文語のまゝ「し」と云うもの……………一八三

第二種形容詞の終止形を「しし」とすること……………一八三

形容詞の連體形の「きしき」の「いしい」となつたもの……………一八五

形容詞の第二活用形の「よくばいそがしくば」……………一九二

静かな 立派な 綺麗な……………一九三

とがつた たいした 等……………一九六

助動詞……………一九六

受身の助動詞……………一九九

れる られる……………一九九

せられる しられる さるゝ される……………二〇七



可能の助動詞	二二
書ける 讀める	二二
使役の助動詞	二七
希望の助動詞	三三
推量の助動詞	三七
打消の助動詞	三九
すぬね	三九
なんだ	四三
受けいで 見いで	四五
ない	四八
まい まじい	五四
過去の助動詞	六一
敬讓の助動詞	六九
れる られる	六九

な  
る  
あ  
そ  
よ  
す  
二七



なさる	あそばす	二七二
くださる		二七六
いたす	つかまつる	二七六
もうす		二七六
ます		二八〇
指定の助動詞		二八五
だ		二八五
じゃ		二八八
です		二九四
べき		二九九
副詞		三〇三
接續詞		三〇五
助詞		三〇七
第一類の助詞		三〇七
第一		三〇七



目次

か	三〇七
が	三二〇
から	三二二
きりぎり	三二三
くらいぐらい	三二四
こそ	三二五
さ	三二六
さえ	三二七
しか	三二八
だけ	三二八
だけに	三二九
で	三三〇
でも	三三三
と	三三四



と……………三三四

とても	とて……………	三三六
たつて	たつても……………	三三七
どころ	どこ……………	三三八
など	……………	三三八
なら	……………	三三〇
なり	……………	三三四
なりとも	なりと……………	三三五
に	……………	三三七
にして	……………	三三七
の	……………	三三七
ばかり	……………	三三九
ほか	……………	三四〇
ほど	……………	三四一
まで	……………	三四三

目次







が……………三五九

から……………	三六一
けれども……………	三六二
し……………	三六三
せ……………	三六四
ぞ……………	三六四
そう……………	三六六
て……………	三六七
と……………	三六七
とも と……………	三六八
とも……………	三六九
に……………	三七〇
の……………	三七〇
のに……………	三七一
ものか もんか……………	三七二

目次



ものの	三七一
ものを	三七三
ことを	三七三
よう	三七三
わ わい	三七三
第二	三七四
たつて たつても	三七五
たら たら	三七五
だつたら	三七五
たり だり	三七七
だつたり	三八〇
つゝ	三八〇
て で	三八〇
ても ても	三八三

第三 ..... 三八三



ても ども ..... 三八三

第三 ..... 三八三

ところが ..... 三八三

第四 ..... 三八三

ば ..... 三八三

第三類の助詞 ..... 三八六

え ..... 三八六

が ..... 三八九

して ..... 三八九

だつて ..... 三九〇

で ..... 三九〇

でして ..... 三九七

ので ..... 三九七

でも ..... 三九八

と ..... 三九八



目次

とも	三九九
に	三九九
の	四〇一
を	四〇四
第四類の助詞	四〇五
第一	四〇五
な	四〇五
なあ	四〇五
ね	四〇六
ねえ	四〇六
の	四〇七
のう	四〇七
まゝ	四〇八
よ	四〇八
第二	四一〇
え	四一〇
感動詞	四一一

泛く感動するに發する聲……………四二一



感動詞……………四一

泛く感動するに發する聲……………四一

驚いた時、氣の引き立つた時に發する聲……………四二

氣のつく時、又わ氣を付ける時に發する聲……………四五

物言いかけて強くたしかめるに發する聲……………四七

心に受け入れた意を云うに發する聲……………四八

承知する意に發する聲……………四九

承知せぬ意に發する聲……………四〇

疑い怪む意に發する聲……………四〇

押しつける意に發する聲……………四二

人を呼びかけるに發する聲……………四二

呼ぶに答える聲……………四三

戒めとめる聲……………四三

いまくしく思つて舌打する聲……………四三

詞の組立……………四四



接頭辭……………四二四

敬つて云い、丁寧に云い、又わ言葉をうつくしく云うに用い

るもの 御<sup>お</sup> 御<sup>み</sup> 御<sup>ご</sup>……………四二四

「まことの」と云う意を云うもの 眞……………四二六

「ちいさい」「低い」「弱い」など云う意のもの 小……………四二七

「始めての」の意のもの 初……………四二七

數を重ねる意、又わ不定の數を云うもの 幾……………四二七

打消す意のもの 不……………四二八

「好くない」「わるい」の意のもの 不……………四二八

「無い」と云う意のもの 無……………四二八

接尾辭……………四二九

敬つて云い、丁寧に云い、又わ言葉をうつくしく云うに用いる

もの 様<sup>さま</sup> 殿<sup>どの</sup> 君<sup>くん</sup> 先生<sup>せんせい</sup>……………四二九

人を罵り呼び、又自分を卑下して云うもの 奴……………四三三

人の複數なるのを云うもの 方<sup>がた</sup> 達<sup>たち</sup> 衆<sup>しゅう</sup>……………四三四



人を罵り呼び、又自分を卑下して云うもの 奴……………四三三

人の複數なのを云うもの 方達衆……………四三四

人又わ物事の複數なのを云うもの 共等……………四三五

互に仲間である意を云うもの 同士……………四三六

人と云う意のもの 手……………四三六

順番を云うもの 目……………四三六

有様を云うもの さ……………四三七

其氣味を云うもの 氣……………四三七

性質を云うもの み……………四三八

そのように思われると云う意のもの そう……………四三八

其様子になる意を云うもの めく……………四四一

殊更に其様子をする意を云うもの めかす ぶる……………四四二

其様に思うと云う意味のもの がる……………四四二

出来難い意味を云うもの かねる……………四四四

推量する意を云うもの らしい……………四四四



目次

一

そうと疑われる意味を云うもの がましい…………… 四四五  
出来難い意味を云うもの にくい…………… 四四五



# 口語法別記引用書目

古事記

元明帝、和銅五年、太安萬侶作、

日本書紀

元正帝、養老四年、舍人親王、太安萬侶等作、

萬葉集

平城朝、大伴家持撰下云、

佛足石歌

孝謙帝、天平勝寶年中、

平安朝時代

續日本紀

桓武帝、延曆十六年、菅野真道等作、

日本國現報善惡靈異記

嵯峨帝、弘仁中、僧景戒作、

類聚名義抄

文德帝、清和帝ノ頃、菅原是善作下云、

竹取物語

光孝帝、宇多帝ノ頃ノ書下云、

宇津保物語

同上ノ頃ノ書下云、

新撰字鏡

醍醐帝、昌泰年中、僧昌住作、

古今和歌集

同帝、延喜五年、紀貫之等撰、

和名類聚抄

朱雀帝、承平末年、源順作、

引用書目



引用書目

土佐日記 同帝、承平四年、紀貫之作、

大和物語 在原滋春作、下云、

後撰和歌集 村上帝、天曆五年、大中臣能宣等撰、

多武峯少將物語 同帝、頃、作、下云、

古今和歌六帖 紀貫之、女、作、下云、

落久保物語 冷泉帝、頃、書、下云、

蜻蜒日記 圓融帝、天延年中、藤原道綱母作、

神樂歌 催馬樂 一條帝、頃、源雅信譜、下云、

東遊歌 風俗歌

源氏物語 同帝、頃、紫式部作、

紫式部日記 同上、

枕草紙 同帝、頃、清少納言作、

拾遺和歌集 同帝、頃、撰、

狹衣 後一條帝、頃、藤原賢子作、下云、

和泉式部續集 同帝、頃、集、(丹鶴叢書)

更科日記 後冷泉帝、康平年中、菅原孝標女作、



狹衣 後一條帝ノ頃、藤原賢子作ト云、

和泉式部續集 同帝ノ頃ノ集(丹鶴叢書)

更科日記 後冷泉帝、康平年中、菅原孝標女作、

今昔物語 同帝ノ頃、源隆國作、(丹鶴叢書)

新猿樂記 同帝ノ頃、藤原明衡作、

後拾遺和歌集 白河帝、應德三年、藤原通俊撰、

榮華物語 堀河帝ノ頃ノ書ト云、

關白內大臣家歌合 鳥羽帝、保安二年ノ集、

散木奇歌集 同帝ノ頃、源俊賴作、

藤原爲忠朝臣集 堀河帝、鳥羽帝ノ頃ノ集、

木工權頭爲忠朝臣家百首 同上、

大鏡 爲忠ノ子爲業作ト云、

悅目抄 同帝ノ頃、藤原基俊作ト云、

童蒙頌韻 鳥羽帝、天仁二年、三善爲康作、

金葉和歌集 崇德帝、大治二年、源俊賴撰、

極樂願往生歌 近衛帝、康治元年ノ書、

雅亮裝束抄 高倉帝ノ頃ノ作ト云、

引用書目



引用書目

和歌初學抄 同帝、嘉應元年、藤原清輔作、(東京大學藏)

梁塵祕抄 後白河法皇御撰、治承ノ頃、

伊呂波字類抄 高倉帝、治承年中、橘忠兼作、

寶物集 同帝ノ頃、平康賴作ト云、

月詣和歌集 安徳帝、壽永元年、賀茂重保作、

鎌倉時代

山家集 後鳥羽帝ノ頃、僧西行作、

萬代和歌集 同帝ノ頃ノ集、(丹鶴叢書)

千五百番歌合 土御門帝、建仁元年ノ集、

建仁三年仙洞五十首 (續群書類從)

新古今和歌集 土御門帝、元久二年、源通具、藤原定家、藤原家隆等撰、

藤原隆信朝臣集 同帝ノ頃ノ集

發心集 順徳帝ノ頃、鴨長明作、

無名抄 同上、

瑩玉集 同上、(和歌古語深祕抄七ノ卷中)

金槐和歌集 土御門帝、順徳帝ノ頃、源實朝作、



瑩玉集 同上(和歌古語深祕抄七ノ卷中)

金槐和歌集 土御門帝、順德帝ノ頃、源實朝作、

承久軍物語

平治物語 葉室時長作ト云、

平家物語 後堀河帝ノ頃、藤原行長作ト云、(正保三年、板本)

源平盛衰記 同帝ノ頃、葉室時長作ト云、

明月記 同帝ノ頃、藤原定家作、

定家假名遣 河内前司親行、僧行阿、合作、

遊仙窟 四條帝ノ頃、藤原伊時訓點、

教訓抄 同帝ノ頃、狛近眞作(内閣文庫藏)

字鏡集 後嵯峨帝、寛元三年、菅原爲長作(帝國圖書館藏)

宇治拾遺物語

古今著聞集 後深草帝、建長六年、橘成季作(元祿三年、板本)

吾妻鏡 龜山帝、文永三年了、

金玉歌合 伏見帝御撰(續群書類從)

宴曲抄 後伏見帝ノ頃、僧明空撰、



引用書目

砂石集 後二條帝、德治三年、僧無住作、

玉葉和歌集 花園帝、正和二年、藤原爲兼撰、

假名論語 後醍醐帝、元弘三年、康連校、

南北朝時代

徒然草 後村上帝ノ頃、僧兼好作、

新千載和歌集 後村上帝、正平十四年、藤原爲定撰、

太平記 後村上帝後龜山帝ノ頃ノ作、

平他字類抄 後龜山帝、元中年間ノ書、

室町時代

曾我物語 (貞享四年ノ板本)

義經記 (寛文頃ノ板本)

平家物語劍の卷

幸若 足利義滿、義持ノ頃、桃井幸若丸作ト云、

謠曲 應永以後ノ作、

公事根源 應永二十七年、一條兼良作、

下學集

文安元年、東麓破初作、



公事根源 應永二十七年、一條兼良作、

下學集 文安元年、東麓破衲作、

中書王物語 一條兼良作、

撮壤集 享德三年、飯尾永祥作、

史記抄 文明九年、相國寺桃源瑞仙作、(寬永三年、活字板、內閣藏)

孟子抄 (寬永活字板、東京大學藏)

廻國雜記 文明十九年、聖護院道興作、

眞宗御文章 文明、明應年中ノ作、

犬筑波集 永正年中、山崎宗鑑作、

閑吟集 大永六年ノ集、(續群書類從)

守武千句 天文九年、荒木田守武作、

詠三百首狂歌 (續群書類從)

田村の草紙

辨慶物語

太秦廣隆寺牛祭祭文 (都名所圖會)

人國記

引用書目



引用書目

梅津長者物語

倭玉篇 (甲)

運歩色葉集 (甲) 天文十七年ノ書(帝國圖書館藏)

運歩色葉集 (乙) (東京大學藏)

節用集 (甲) (饅頭屋板、横本)

節用集 (乙) (饅頭屋本)

元龜字叢 元龜二年、宗珠藏主作(帝國圖書館藏)

理慶尼の記 天正十年ノ談、甲州武田氏一族、

狂言記 續狂言記 拾遺 天正年中、

詠歌之大概 永既序、聽塵ノ作(帝國圖書館藏)

節用集 (丙) 天正十八年(泉州堺板、東京大學藏)

天正日記 小田原征伐ノ記

伊曾保物語 文祿二年ノ作、

節用集 (丁) 慶長二年板(易林本)

江戸時代

おあん物語 慶長五年ノ談、



おあん物語 慶長五年ノ談、

昨日は今日の物語 天正、文祿カラ、寛永マデノ話、

徒然草抄 慶長六年、僧安立作、

千代茂登草 藤原肅作、

太田和泉守覺書 慶長十五年ノ書、(改定史籍集覽)

節用集 (戊) 慶長十六年(京都板)

倭玉篇 (乙) (慶長板本)

おきく物語 元和元年ノ談、

清正高麗陣覺書 加藤清正ノ臣下川兵太夫ノ記、(續々群書類從)

太閤記 元和三年、小瀬甫庵作、

あづまぢの記 元和四年烏丸光廣作、(扶桑拾葉集、二十八)

大久保彦左衛門物語 元和八年ノ記、

醒睡笑 元和九年、安樂庵策傳作、(萬治元年板)

戲言養氣集 元和活字、(雪中庵雀志藏)

諸士軍談 大坂冬夏陣ノ記、(改定史籍集覽)

引用書目



引用書目

中村座猿若狂言 寛永元年(燕石十種)

中村座新發知太鼓 同上、

そごろ物語 寛永ノ頃、三浦淨心作、

犬子集 (狗獮集) 寛永十年、松江重頼作、

可笑記 寛永十三年、淺井了意作ト云、

油糟 寛永二十年、松永貞徳作、

新增犬筑波集 (一名、淀川) 同上作、

正章千句 慶安元年、安原貞室作、

吾吟我集 慶安年中、石原未得作、

かたこと 慶安三年、安原貞室作、

倭玉篇 (丙) (慶安五年板)

むさしあぶみ 明曆三年大火ノ記、淺井了意作、(溫知叢書)

をぐりの判官 明曆、萬治ノ頃ノ作、(淨瑠璃本)

東海道名所記 萬治元年、淺井了意作、

四天王武者修行 萬治二年板(金平本)

天狗羽打 萬治三年板(金平本)

糸竹初心集 寛文四年板、中村宗三作、



東海道名所記 萬治元年、淺井了意作、

四天王武者修行 萬治二年板(金平本)

天狗羽打 萬治三年板(金平本)

糸竹初心集 寛文四年板、中村宗三作、

山鹿語録 寛文五年、山鹿素行作、

古今夷曲集 寛文五年、生白堂行風作、

後撰夷曲集 寛文年中、同上作、

卜養狂歌集 寛文九年、半井卜養作、

諸國盆踊唱歌 寛文年中ノ集(我自刊我叢書)

西翁十百韻 延寶元年、西山宗因作、

淋敷座之慰 寛永カラ延寶四年マデノ流行小唄ノ集(新群書類從)

西鶴五百韻 延寶七年、井原西鶴作、

吉原小歌總まくり 天和二年板(續百家說林)

西鶴一代男 天和二年、井原西鶴作、

鹿の卷筆 貞享二年、鹿野武左衛門作、(元祿五年板)

好色五人男 貞享三年、井原西鶴作、

近代艶隱者 同上作、



武道傳來記 同上作、

懷硯 貞享四年、同上作、

日本永代藏 貞享五年、同上作、

狂歌鳩杖集 天和貞享ノ頃、寶藏坊信海作、

雜兵物語 同上ノ頃、高崎城主松平信興作、

西鶴置土産 元祿六年、井原西鶴作、

合類節用集 元祿十一年、榎島昭武作、

松の葉 元祿十六年、秀松軒作、

類聚名義抄、悦目抄、寶物集、定家假名遣、其外、年代作者に論のある書もあるけれども、姑く、通例傳えて居る所に随つて置いた。慥に時代の分らぬ書は、押しあてに列ねた。ここに擧げたものゝ外に、唯、一二箇所引いたものゝわ、直ぐに其書名の所に、年代作者を記しておいた。

平安朝時代の極樂願往生歌、近年、京都の建仁寺中で掘出したもので、其寫真から採つた。梁塵秘抄も、近年、和田英松氏が發見して、大正元年八月、佐々木信綱氏の出版したもの。鎌倉時代の平家物語にわ、異本が極めて多い、姑

く正保三年の板本に據つた。後の寛文板の義經記、貞享板の曾我物語も、同様



眞から採つた。梁塵秘抄も、近年、和田英松氏が發見して、大正元年八月、佐々木信綱氏の出版したもの。鎌倉時代の平家物語にわ、異本が極めて多い、姑く正保三年の板本に據つた(後の寛文板の義經記、貞享板の曾我物語も、同様である)。假名論語わ、古寫本卷物で、(三卷、缺本)大槻文彦の所藏である、康連わ、三善氏の人であらう、卷頭の貼紙に、大學頭菅原在茂とあつて、高山寺の朱印がある、在茂は、文治前後の人である、在茂の寫したのを、康連が校したとすれば、此書は、鎌倉時代の初のもとも見られる。室町時代の平家物語劍の卷わ、中に曾我物語の事があるから、姑く其次に置いた。孟子抄わ、作者年代が知れないが、史記抄と同時のものと思われる。運歩色葉集の乙わ、以から加までで、異本である。狂言記の事に就てわ、狂言わ、謠曲より古いもの(協師を「あど」と云うなど)のようだけれども、一旦、中絶して、豊臣氏の頃、再興したものらしいから、用語わ、天正頃のものであらう、因て其頃のものとした、大藏流と鷺流のものから採つた。詠歌之大概わ、定家のものに注釋したもので、中に、宗祇などの名がある。伊曾保物語わ、文祿二年に、葡萄牙人が和譯して、横文字で書いたものを、新村出氏が、假名交り文に直して、明治四十四年六月に刊行したもの。江戸時代の醒睡笑わ、寛永十九年の寫本で、大槻文彦の所藏のものからも採つた、但し、萬治元年の板本わ、一卷と二卷を入れちがえてある。



引用書目

一四

口語法別記端書

大田文庫



口語法別記端書



世の開けた初に、人に、言葉があつて、その後、文字が出来て、言葉を書き取る  
ことゝなつた。その時、書取つた言葉、即ち、文章で、言葉と文章とわ、同じ  
である。そうして、言葉というもの、年を歴るに随つて變わるもので、言葉  
が變われれば、文章も變わつた、今、奈良朝以前の文と、平安朝の文とを見くらべ  
れば、其姿の違つて居るので知られる。然るに平安朝の盛んな頃、文學も、  
盛んであつて、文を書き、歌をよむのが、自然と、一つの藝のようになつて、師匠  
が出来て、學ぶと云うようなことゝなり、言葉の方、年が立つて、變わつて行  
くけれども、文章、平安朝の盛んな頃の言葉で書くことゝ固まつて、終に、口  
に云う言葉と、文に書く言葉とが、二道となつて來て、鎌倉時代になつて、話  
し言葉と、文章言葉、即ち、口語と、文語とが、甚しく分れた、それから、又、數百年の  
間、口語、變わりに變わつて來ても、文章、やはり、多く、平安朝時代の言葉で  
書くことゝなつて、口語のまゝに文を書くことゝ云うこと、わ、まず、なかつたが、江  
戸時代になつて、口語で書いた書物も、民間に段々と出て來た。



鎌倉時代以後、七百年の間、大名と云うものが、全國にあつて、銘々に、其領分  
境を立て、居て、江戸時代にわ、其地方の方言を國手形など、云つて、其領分  
の人だと云うを證する爲に、改めさせなかつたようなこともあり、其上交通  
も、不便であつて自然と行きかひも少ないような譯であつたから、地方々々  
の口語が、まぢく變つて居て、十里二十里も隔たれば、違つて、甚しいの  
わ、出羽奥州の人と、九州の人とわ、同じ日本人でありながら、話をして、互に  
分らぬようになつた。それであるから、我が國言葉にわ、文語にわ、一つに定  
まつたものがあるが、口語わ、全國どこも方言であつて、東京の言葉わ、東京の  
方言で、京都の言葉わ、京都の方言で、其外國々、皆方言をつかう。そこで、全國  
同じに通ずる口語を立て、規則を定めねばならぬ。扱、口語の目當とするも  
のを、何と定めようか、邊鄙の方言わ、採ることわ出來ぬから、東京方言か京都  
方言かにせねばならぬ。東京わ、今わ、皇居もあり、政府もある所で、全國中の  
者が、追々、東京言葉を眞似てつかうようになつて來て居るから、東京言葉を、  
日本國中の口語の目當とするがあたりまえのこと、と思ふ。しかしながら、  
東京言葉と云つても、賤しい者にわ、訛が多いから、それは採られぬ。そこで、

東京の教育ある人の言葉を目當と立て、そうして、其外でも、全國中に廣く行



日本國中の口語の目當とするがあたりまえのこと、と思う。しかしながら、東京言葉と云つても、賤しい者にわ、訛が多いから、それは採られぬ。そこで、

東京の教育ある人の言葉を目當と立て、そうして、其外でも、全國中に廣く行われて居るものをも酌み取つて、規則をきめた。かようにして出來たのが本書の口語法である。臺灣朝鮮が、御國の内に入つて、其土人を御國の人に化するようにするにわ、御國の口語を教え込むのが第一である。それに就いても、口語に、一定の規則が立つて居らねばならぬ。口語法わ、實に、今の世に、必用なものである。

○奈良朝以前にわ、言葉に、伸び縮みわあつて、「まもり(守)が麻毛良比(古事記、神武の段)かくす(隱)が可苦佐布(萬葉集、一)ゆく(行)が由可久(同十四)など、伸びたり、又、いかにいふ(如何云)が以柯爾輔(繼體紀)うるて(飢而)が惠而(推古紀)ひきいれ(引入)が比岐例(皇極紀)あまおり(天降)が安母理(萬葉集、二)おもふな(勿思)が母布奈(同六)きえのこり(消殘)が氣能己里(同二十)など縮んだりしたものが、わなかく、多く見えるけれども、まだ音便と云うものわ、殆んど無かつたようにおもわれる。

古事記の神武の段に、「かみかせ(神風)を、加牟加是」とし、萬葉集、十五に、「まをす(申)を、母に麻于之て、佛足石歌に、「捧げ麻宇佐牟、萬葉集、十八に、「まけ(設)を、麻宇



氣とあるなどわ、音便であろうか。

音便の盛に起つたのわ、平安朝以後の事で、嵯峨帝の弘仁中の靈異記の序の釋に、「償、ツクノウ、傷、ソコナウ」、近江の石山寺に藏する文徳帝の天安二年の大智度論の中に、「次第」の字に、「ツイデ」下二段活用の「次て」「次つ」の音便、萬葉集、二十、  
「媚、ウツクシウス」「啄、ツイバム」「班、ツイヅ」など、あつて、山城の京の初の頃から、  
音便が見えて居る、是れが、言語の變遷の初である、どうして、音便と云うものが起つたかというに、石原正明の年々隨筆に、

萬葉集、續日本紀などに、かなのたがへる所はなし、かくて、奈良の京に、まがふ所なかりしを、今の京となりて、言便といふ事、いできたり、いつの比よりか、いふ事の考なし、か  
やうの事、いつよりと、きはやかに知るべきに、あらず、もしは、貞觀の比より漸有しに、言便といふは、いひ易きやうに、まげていふ事にて、よろづの訛言、ヨコナマツみな、これよりいでくるなり、さるは、其頃の人物をいふに、容止をおもひて、口を大にひらき、唇のしばく、動くを、威儀なしとして、人がらをつくるひ、さて、いひ易きやうに、物いふほどに、いゝえゝおをも、まがひて、わかりがたく、ひふほも、いうおときこゆる様になれりしな

り、延喜天曆のころよりは、ひたすら、其定なりしかば、かなのたがひ行く源



として、人がらをつくるひきて、いひ易きやうに、物いふほどに、いゝえゝおをも、まがひて、わかりがたく、ひふほも、いうおときこゆる様になれりしな

り、延喜天曆のころよりは、ひたすら、其定なりしかば、かなのたがひ行く源は、此時より、觴を濫へたり。

西洋の言語學說にも、このようなことが云つてある、それもそうであろうが、何にせよ、世の中が開け進むに随つて、人のからだも、考えも、いそがしくなり、舌、唇などを多くつかわないうで、早く物を云おうとして、成るべく、發しやうい音をつかうようになつたから、音便が多くなつたのであろう。

天治本新撰字鏡、媿、小兒、知比佐伊、小、人、

古今集、典侍、あまねい、洽、子、

後撰集、内侍、たひらけい、平、け、子、

宇津保物語、貴宮卷、粉、しろい、白、き、もの、

催馬樂、淺綠、淺綠、や、己、以、濃、き、花田、

類聚名義抄、永、ナ、ガ、ウ、ク、ス、固、カ、タ、ウ、ク、ス。

竹取物語、う、つ、く、し、う、く、お、は、す、る。

神樂歌、早歌、最、將、奈、加、宇、長、く、て、

催馬樂、紀伊國、風、し、も、不、伊、吹、き、た、れ、ば、



同、高砂、今朝左伊（咲き）たる初花に、

同、早歌、巾子（こし）於止（し）以（こ）落（し）しつ。

宇津保物語、菊の宴、おぼしめい（召し）てのたまはするにこそはあめれ。

同、俊蔭、加茂に詣でたまう（給ひ）たりしかば。

催馬樂、酒飲、酒をたうべて、たべ（惠宇）醉（ひ）て、

同、蟋蟀、木の根を掘り波牟（食み）で、

土佐日記、つん（摘み）たる菜、

又、語をつめて云うことも出て来た。

竹取物語、え知らで（す）斯（く）いふ。

同、迎へに、人々（参）で来（こ）んず（来むとす）、

しかし、朱雀帝以前の書物にわ、音便わあるが、假名遣わ、一定して居ると云わ  
れて居る。然るに、村上帝の天曆の頃から、假名遣も追々變わつて来た、天慶  
の平將門、藤原純友の亂などが響いたのである。動詞の活用の變わり（音  
便で變わつたのもある）も、此前後から、少しずつ見える。

類聚名義抄、渝（カ）ヘル、躑（ク）エル、（下二段活用の「蹴うる」の變）

落久保物語、二、只今の太政大臣の尻はける（蹴る）の約とも、此殿の牛飼



類聚名義抄、渝、カヘル、躑、クエル、(下二段活用の「蹴うる」の變)、

落久保物語、二、只今の太政大臣の尻はける「蹴る」の約とも、此殿の牛飼に、手觸れてむや。

蜻蜒日記、中、夢をも佛をも、もちいるべしや、もちゐるまじや。

紫式部日記、上、をりくゝの有さまにしたがひて、もちひんことのいとかたかるべし。

源氏物語、竹川、はぢらひて、おはさうする(おはさむとする)いとをかしげなり。(「おはす」に、四段活用があると認めてである)。

和泉式部續集、上、おとせう(爲む)といひたる人のおとせねば、

此頃の源氏物語、枕草子、其外、物語、日記、草子などに、音便のあるのわ、擧げ盡しがたい。是から後の書物も、皆そうである。

後三條帝、白河帝の頃から、音便わ、勿論、假名遣も、甚しく變わつて來て、動詞の活用の變わりも、ますますく見える。六衛府や、檢非違使に、諸國の武士を召遣われ、前九年、後三年の戦から凱旋した東國の武士の、京に入込んだのも多かろうし、後三條帝の時から、藤原氏の權力が衰え、白河帝が、院の北面の侍に、諸國の武士を召されなどして、源平等の武士の勢が盛んになつたなどから、京



都の言葉に、變化が起つたのであろう。それから保元平治の亂となつて、ますます變わつて來たに違いない。此頃から、動詞の活用の連體形を、終止形にすることも多くなつて來た。

藤原爲忠朝臣集、時鳥待ちつくしてぞ、朝いねる、いぬる、聞けといさめて、軒に鳴くなり。

木工權頭爲忠朝臣家百首、いかにせむ、かくれる、かくる、鷹の、見えがたく、つれなき戀に、さはく心を。同、猫の緒に、かゝりし簾の、はさまより、ほの見し人を、ねう、寐む、とこそ思へ。

康治元年、極樂願往生歌、憂シヤ憂シ、厭へヤ、厭へ、假初ノ、カリノヤドリヲ、イツカ別レウ、別れむ。

今昔物語廿六下、何ト心モ不得思ユル、思ユ見返テ、恐々見レバ、同、三十、簾ノ内ニ立テ聞ムトスル、トス、夜ナレバ、人モ无シ。

源平の興亡から、鎌倉となつて、言語に變動の起つた事わ、めざましいものである。そうして、此頃から、文の掛り結びの法則が崩れ始めた。

ひらいて、開きて) さはいで、騒ぎて) ながいて、流して)

うつて、打ちて)

つくつて、作りて)

むかうて、向ひて)



ひらいて、開きて  
さはいで、騒ぎて  
ながいて、流して

うつて、打ちて  
つくつて、作りて  
むかうて、向ひて

むかつて、向ひて  
しんで、死にて  
しのうで、忍びて

さけんで、叫びて  
ようで、讀みて  
かこんで、圍みて

さかえる、榮ゆる  
からめる、搦むる  
やぶれる、破るゝ

あづからう、預らむ  
かくさう、隠さむ  
おきう、起きむ

かたぶけう、傾けむ  
みてう、満てむ  
まゐらせう、參らせむ

舟に、篝をな、ともいそ、燈しそ  
三日に過ぎ、過ぐまじ。

物を負うたり、だいたりして、  
六十六ヶ國に別れた、たるなり。

最後の御供で、にて候へば、  
牛の角文字、すぐなる文字、

説法をさせ、せさせ、まゐらすべし。

ねほれ候はん、ぬからには、さる事やつかうまつるべき。

牝鹿をば、射いで、射で、ぞおとしける。

寶物集、發心集、金槐集、平家物語、古今著聞集、砂石集、くわしい事わ、後に云う、

南北朝時代となり、太平記、二十一、天下時勢粧に、「公家の人々、いつしか、言ひも

習はぬ坂東聲をつかひ、云々」とあり。「かたことに、みづからのことを、をれと



いふは、尊氏公の、世の中を心のまゝにしたまひつる比より、別してはやり出で侍り。など、あり。おれわ、おのれの略、幸若、史記抄に見える、後の代名詞の所を見よ。室町時代に、戦争が續き、應仁の亂に、全國の兵が、京都に入り亂れた。此頃から、言葉が一段と變わつた。文の掛り結びなどの、全く崩れたのも、室町時代からである。

すてい、捨てよ、こい、來よ

せい、爲よ

みう、見む

きう、着む

こう、來む

いなう、往なむ

しなう、死なむ

今日は、何方へぞ、出やう、出でむと存ずる。

甘いを、すぐ衆へは、甘いで進じやう、進せむず。

歌、一首、詠うで、見やう、見むか。

噺事で、尋ねやう、尋ねむず。

外ノ事ハ、ワルイ、惡しト心得、

後難が口惜しい、口惜し

臆せいで、臆せで、取つて吞うであれ。

暇乞ヲ申サイデ、申サデ、罷歸ラレ、

終ニ、殺シハセラレナシダ。

最前から、氣がつかなんだ。

何事があると問うた、たり

左へ折つた、たる、烏帽子なり。

韻が、三句ニ、フメ、履まれ、た、たり

爰から讀め、讀まれ、候。

天下は、我が物ぢや、である

冠ノ緒ヂャゾ。



韻が三句ニ、フメ履まれたり

爰から讀め讀まれ候

天下は、我が物ぢや、である

冠ノ緒ヂャゾ。

我が姫や、であると號し、いつきかしづき、

遠國に隠れもない大名です、でおはす

義經記、曾我物語、幸若、史記抄、閑吟集、守武千句、狂言記、くわしい事わ、次に云  
う、

それから、織田氏、豊臣氏の世を歴て、江戸時代と、遷りかわつて來たが、鎌倉室町時代に變わつた言葉を、そのまゝ傳えて、甚しい變わりわなない。唯、其時代に、「忍う」で「頼う」で、なども云つたのが亡びて、今でわ、多くわ、「忍ん」で「頼ん」でとなり、「流いて」で「隠いて」など、云つたのが亡びて、多くわ、元の「流して」で「隠して」となつた。

東國の方言わ、古いところでも、萬葉集の東歌、防人歌や、東遊歌、風俗歌などに、少しわ、見えて居るが、其後わ、書いた書物がないから分らぬ。江戸時代になつて、書物に書かれるようになつて、變わり目の、著しく現われたものわ、

飽きる、(飽く)

足りる、(足る)

借りる、(借る)

案じる、(案ずる)

判じる、(判ずる)

復さない、(復せぬ)

解さない、(解せぬ)



起きよう、(起きむ) 受けよう、(受けむ) こよう、(來む) しよう、(爲む)

起きろ、(起きよ) 建てろ、(建てよ) こう、(來よ) しろ、(爲よ)

書かない、(書かぬ) 落ちない、(落ちぬ) 遂げない、(遂げぬ) こない、(來ぬ)

行くべい、(行くべし) やめべい、(止むべし) こべい、(來べし) しべい、(爲べし)

書いてる、(て居る) 読んでる、(で居る) それだ、(である) これだ、(である)

いらつしやい、(入らせられよ) なさいまし、(なされませ)

これならば、(ならば) よかろう。 昨日行つたら、(たれば) 居なかつた。

などである。 しかし、是も、古くから行われて居たのか、何とも分らぬ。

○東國の言葉わ、昔わ、京都の人からわ賤しめられて居つた、源氏物語の宿木、東屋などに、東國の言葉を、「あづま聲」と云い、平家物語に、齋藤實盛の言葉を、「坂東聲」と云つてある、拾遺集に、「あづまにて、養はれたる、人の子は、舌だみてこそ、物は言ひけれ」とあるのでも分る。 然るに、東國武士の勢が盛になり、鎌倉室町の世に、東國言葉が、京都言葉を襲つて、江戸の世となつて、又、新に、江戸言葉が、出來て、今でわ、江戸言葉が、日本の口語の目當となるようになった。 江戸わ、もと、空漠とした地に、新に、町を開いたものであるから、土地の者も居

たろうが、畿内、東海道筋の町人が、多く集つて來たものであつて、江戸の言葉



江戸わ、もと、空漠とした地に、新に、町を開いたものであるから、土地の者も居たろうが、畿内、東海道筋の町人が、多く集つて来たものであつて、江戸の言葉わ、その初わ、甚だ混沌としたものであつた。然るに、一方に、武士といふ者があり、戦國時代の餘習で、旗本奴の大小の神祇組、又わ、男達、町奴の六方組、白柄組、などいふものが、盛に出て来て、是等が、關東の荒くれた氣風を、言葉の上にも及ぼして、上方言葉のなまぬるいものを變じて、強く急なものとして、芝居の荒事狂言の上にも用いられ、それが廣がつて、遂に、一つの江戸言葉といふものが、成立つたものと思う、是が、元祿頃に至つて、一定したので、つまり、關西と關東との言葉が、雜つて出来たものである。

京都の言葉わ、東西南北に廣がつて、遠くなるに隨つて、段々に變わるが、その變り目わ、色のぼかしのようで、はつきりと境目が分らぬが、江戸言葉は、四里四方の内に限つて、其境を出ると、四方は、元の武藏の言葉であるから、海中の島のようなのである。これが俄に出来た都であるからである。しかし、江戸時代にわ、同じ江戸言葉の中で、町人言葉でも、山の手言葉、下町言葉、神田の職人言葉、吉原言葉、佃島言葉など、それ〴〵違つて居た。武家の言葉の方でも、幕府の旗本言葉、御家人言葉、又わ、諸國から勤番する者わ別とし



て、諸大名の江戸定府の家來の言葉などが、又異なつて居た。明治の世となつて、それが、大分混合して、諸國の侍などが、集つて常住するようになつても、皆、江戸言葉に化せられるようになり、そうして漢學書生が多く、政府の官員となり、學校の教員となつたから、漢語を遣う事が大に行われ、漢文の訓點書き下しの文語などが、口語にまじるようになり、遂に、今の東京言葉となつたのである。

○信濃越後と、美濃飛驒越中との間に、南北に互る御嶽系の大山脈で、言葉わ、大凡、東西に分れて居る。萬葉集の東歌と云うのも、遠江信濃から東である。今の口語も、此山脈で分れて居ること、次のようである。

東	たゝかう	やしなう	起きよう	受けよう
西	たゝこう	やしのう	起きう	受きよう
東	言つて	買つた	起きろ	受けろ
西	言うて	買うた	起きい	受けえ
東	高く	嬉しく	いゝ	
西	高う	嬉しう	えゝ	

東書かない書かないで書かなかつた



西 高う

嬉しう

えい

東 書かない 書かないで 書かなかつた

西 書かん 書かいで 書かなんだ

東 月だ 花だ

西 月じや 花じや 月や 花や

尙、細かいことわ、まだあるが、大體わ、右のようである。但し、「起きよう」「受けよ  
う」などわ、西わ、畿内中國まで及んで居るし、「たゝかう」「たゝこう」「いゝ」「えゝ」など  
は、全國まざつて居る。

○東國の口語の「言つて」「買つた」「月だ」「花だ」が、鳥取縣、島根縣に行われ、「起きろ」「受  
けろ」が、筑後、肥前、肥後に行われ、「書かない」「見ない」が、備後、出雲、日向にも行われ  
て居る。これわ、鎌倉室町時代に東國の武家が、西國の守護地頭となつて、移  
つて住んだものもあり、江戸時代にわ、大名の國替と云う事があつて、家來を  
残らず引連れて、諸方え移つて、それらからして、口語を移したこともある。  
これらの事わ、よく研究したらば、面白い事であろう。

○名詞、代名詞、數詞、副詞などわ、昔も、今も、東國も、西國も、語わ變わつても、文法  
の上の變遷わ殆ど認めるものがない。



